

機関番号：17701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20730509

研究課題名（和文）近代日本の教育学と発達概念の展開

研究課題名（英文）Education and the Idea of Development in Modern Japan

研究代表者

前田 晶子 (MAEDA AKIKO)

鹿児島大学・教育学部・准教授

研究者番号：10347081

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本の発達概念の形成史と、その教育学への定位の過程について、教育の基礎学としての児童研究における発達研究の分析、児童研究に中心的役割を果たした富士川游の教育病理学の学説史的位置づけ、発達論争（1934年）の論者である山下徳治における発生論的発達思想の解明を通して明らかにしたものである。全体として、進化論などの発生論的関心、病理学などの医学的関心、そして仏教やキリスト教の宗教的関心の交差する地点で発達概念への探究が行われていたことが浮かび上がった。

研究成果の概要（英文）：This study focuses the concept of “development” and how it became central to several educational theories in modern Japan. Through the analysis of *the Journal of Child Research* and the thought of Fujikawa Yu, a main writer of the journal, we clarified that in Meiji period there were not only educational interests, but also medical and embryological ones in this concept of development. Yamashita Tokuji, who took a polemic on this issue in 1934, also inquired into primitive and even religious meanings to this idea. While there were fruitful approaches in this field of child research, they were hardly pursued by the majority of educationalists.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2006年度			
2007年度			
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総 計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：発達概念、『児童研究』、富士川游、教育病理学、治療教育学、山下徳治、
発達論争

1. 研究開始当初の背景

過去 20 年間の日本の教育改革は、現在

「人間力」をキーワードに確かな学力や社会的自立を目指す方向性が明確となり、ここに

きて新しい時代の人間像が明確になりつつあるように思われる。また、近年では教員養成や免許制度の見直しが改革の焦点のひとつとされ、「教職大学院」「教員免許更新制」の導入など、教員の資質向上のための養成・研修の充実が急務とされている。このような動向から、現代社会において生じている諸種の教育問題に対して、個別的な対応策にとどまらない、教育理念の根本的な刷新が企図され、またそれに対応した教員の資質についての吟味が必要とされる段階に到達しつつあるといえるのである。

しかし、近年の教員養成・研修の具体的な改革の取り組みにおいては、新しい教育理念としての「人間力」や求められる「教員像」とはなにかが論議される際、その中身が必ずしも明確ではない。基礎学力の向上や問題解決能力など個別的なトピックの議論はなされても、それらを包括する教育理念を共通理解とするところまでは容易に到達できないというのが現状である。

では翻って、これまでの近代教育を支えてきた教育理念は、明示的なものとして共有されてきたのだろうか。例えば、「教育的価値」（勝田守一）という概念は、その中核に「発達」を位置づけ、教育学・教育現場でしばしば用いられてきたものである。しかし、「発達」概念自体については心理学領域の研究成果を参照してきた経緯から、教育学概念としても、また実践における教育理念としても十分に吟味されないまま今日に至っているのではないだろうか。つまり、今日、課題となっている教育理念の設定の難しさは、歴史的にみれば、これまでの日本の教育学が「発達」を教育理念の中心に掲げながらも、他領域における発達研究の成果に依拠し、教育学固有の概念として鍛え上げてこなかったところに起因すると考えられるのである。本研究は、「発達」概念の史的検討が教育史の重要な課題であると考え、計画したものである。

2. 研究の目的

本研究は、上述の研究上の背景をもって、近代日本における教育学と、そこでの「発達」概念の展開を明らかにすることを目的として設定した。特に、これまでブラックボックス化されてきた教育理念としての「発達」概念の中身について、その歴史・社会的背景を押さえながら、近代日本に固有の人間形成観

を解明することを中心課題とした。そして、本研究を通じて、1970年代以降、教育学内外から疑義が呈されているこの概念の恣意性・政治性・階層性といった問題点を分析すると同時に、現在の教育改革において明確化が要請されている教育理念についての教育史からの示唆の提示を目指した。

3. 研究の方法

本研究の準備状況として、研究代表者は既に、「日本における発達概念の形成史」というテーマで幕末から明治初期に翻訳語として登場した「発達」概念が、日本社会において幾度かの再編を経て普及して行く過程を明らかにし、その人間形成観を社会の変化との関係で分析してきた。その成果を引き続きつつ、本研究では、とくに1930年代に時代をシフトさせ、この時期の教育学研究における「発達」概念の位置づけを明らかにすることを通して、近代日本の教育学概念としての「発達」の内実を明らかにすると同時に、現代の教育改革に対する歴史的観点からの示唆を提示したいと考えた。

具体的には、第一に、1898年に創刊された雑誌『児童研究』における発達研究の展開について、資料収集と分析を行った。関連する先行研究を検討した結果、書誌学的研究が蓄積されている一方で、本誌と教育学との関係は未だ明らかにされておらず、全体として個別的なトピックの分析にとどまっていることが分かった。そこで、教育の基礎学としての児童研究の役割を明らかにするために、『児童研究』がどのように自らの役割を規定していたのか、そこに「発達」概念がどのように関わったのかを課題として分析を行った。

第二に、第一の課題をより深めるために、人物研究を行った。特に、明治末以降『児童研究』の中心的存在となった富士川游の思想について検討を行った。

第三に、最終年度として、山下徳治のライフヒストリー研究を中心に調査を行った。山下の鹿児島時代の資料収集に加え、ドイツ留学時代の足跡を辿る調査を行った。

4. 研究成果

研究成果としては、『児童研究』の分

析においては、(1)『児童研究』誌上では、たびたび教育学や心理学だけでなく身体的研究(生理学、医学、生物学など)の必要性が訴えられていること、(2)その方向性を進めようとした担い手は、長らく編集を務めた高島平三郎ではなくむしろ医学者富士川游(教育病理学)であったこと、(3)しかし、児童の精神面と身体面を見渡したトータルな研究の成立は容易ではなく、主に外国研究の輸入が中心であったこと、(4)そして子どもの心身の変化を示す概念(発達、成長、発生、生長など)が吟味されたというよりは、論者の志向性により使用傾向が異なることがうかがわれた。さらに、教育学の基礎概念である「発達」概念は、『児童研究』においては精神面に傾斜する傾向があり、その一面性が問題視されつつも容易には乗り越えられなかったことが分かった。

富士川游研究については、(1)呉秀三とともに日本医史学会を設立し『日本医学史』(1904)をまとめるなど医学史研究の展開があっただけでなく、(2)同時に宗教に関する研究(『富士川游著述選』第1〜5巻、中山文化研究所)がまとめられていた、という二方向の研究活動が同時に行われていたことが注目された。このことは、日本における西洋医学の受容過程における日本文化との接合の問題、すなわち日本人の身体感覚の宗教的側面と西洋医学の関係が富士川によって追及されていたことを示唆している。この点は、日本の発達概念における身体論の脆弱性に着目する本研究にとっても重要な鍵となると考えた。

また、上述の歴史研究と同時に、近年とくに教育思想史研究を中心として展開されている戦後教育学批判における発達論批判の整理・検討も行った。これらの議論については、発達概念の社会的ロジック(ex. 競争への親和性)への批判を展開しているところに共鳴しつつ、富士川にみられるような教育病理学研究を通しての医学的・宗教的身体論追求の努力があった歴史を踏まえていないところは不十分であり、それゆえに新しい概念の提示(ex. 生成)において歴史的な文脈が見落とされていることが指摘

できると考える。本研究の意義は、発生論的な発達論研究の日本における系譜を明らかにすることで、そこから発達論の新しい可能性を探るところにあると、改めて位置づけた。

山下徳治研究については、(1)山下の鹿児島時代の生育史を辿り、初発の教育への関心の質を明らかにした。鹿児島県下の教育界の動向や、山下が受けた郷中教育(自彊学舎)関係について調査を行った。その結果、人類の「原始性」への関心が教育者としての素地にあったこと、海洋学や植物学への関心もまた教育との関わりで登場していたこと、教育実践では身体の鍛錬が中核に位置づけられ、晩年の身体教育の萌芽がこの時期に現れていたことを明らかにすることができた。

また、(2)ドイツ留学時代の史料収集を行った。山下が1920年代半ばに留学したマールブルク大学には、当時の聴講生名簿、受講した科目がわかる資料が大学文書館に保管されていたほか、市の文書館にて彼の住民票が発見され、他の日本人留学生との関係など留学中の生活の一端が明らかになった。また、大学附属図書館や、哲学部附属図書館において、当時の講義録や著作物の複写を行った。その結果、山下が、ドイツにおいて学業に励むと同時に、宗教的な生活を送っていたことがうかがわれ、山下研究におけるキリスト教の位置づけが看過できない課題であることが明確となった。

さらに、(3)ドイツ調査において、昨年度中心に取り組んだ医学者富士川游の教育病理学研究について、ドイツの動向を調べた。ここでは、富士川がイエナ大学に留学していた当時の関係文献を得ることができたが、その現在までの病理学的な教育論の系譜について十分に追うことができなかった。今後は、「治療」概念の検討を含め、ドイツ医学を経由した子どもの発達観の検討を課題としたい。

以上、3年間の研究を通じて、日本における「発達」概念の課題として、医学者や心理学者において「身体-学習」連関の捉え方の難しさが認識されており、それを超える概念の検討として、「治療教育学」「教育病理学」

(富士川)、「人類の原始性」「直感」「自発的発展」(山下)などの提示があったことがわかった。今後は、これらの提案をより吟味し、その歴史的、文化的、宗教的性格を分析すると同時に、近代的成長論の日本の特性として明らかにしていきたい。加えて、近年注目されている「臨床」「ケア」など、従来の教育への異議申し立てとして提出されている概念などとの関係で、歴史研究としての本研究の現代的意味を考察していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

① 前田晶子「山下徳治における発生論の形成(1)」『鹿児島大学教育学部教育実践研究

紀要』第20巻、2010年12月、pp.153-160(査読無)

② 前田晶子「子どもの育ちの「不確かさ」と向き合う発達観」『現代と保育』Vol. 77、2010年4月、pp. 72-77(査読無)

③ 前田晶子「『児童研究』における発達思想の形成」『鹿児島大学教育学部 研究紀要』教育科学編、第60巻、2009年、pp. 171-179(査読無)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前田 晶子 (MAEDA AKIKO)
鹿児島大学・教育学部・准教授
研究者番号：10347081